



亀井静香の

政界交差点

俺

が建設大臣を務めていたとき、22のダム事業を中止させた。自民党政調会長だった'00年8月には、ダム事業48件を含め、公共事業233件を中止させ、前年比で2兆8000億円の無駄ガネを削減した。

当時の自民党は、必要のないダムを建設しては、大手ゼネコンが利益を一手に得る公共事業を繰り返していた。これでは、地域経済弱者の救済には繋がらない。そう考えて、必要な公共工事や災害対策の施策だけ残し、無駄な公共工事を中止させていった。

大手ゼネコンや利権にまみれた議員からの反発は凄まじかった。

だが、すべて突っぱねた。私利私欲にまみれた連中からの反発を恐れていては、国民のための改革は成し遂げられない。俺とまったく同じ考えを持っていたのが田中康夫だった。

田中は非常に才能のある男だ。一橋大学在学中に文藝賞を受賞した作家であり、阪神・淡路大震災ではボランティア活動で名を上げ、'00年には長野県知事に就任した。知事就任後には、脱ダム宣言や脱記者クラブ宣言など革新的な改革ばかりでなく、公共事業の見直しや公務員人件費の削減で、赤字だった長野県の財政を黒字に転換させた。抜群の政策能力の持ち主といっている。

田中と初めて会ったのは、'04年9月に田原総一朗さんのテレビ番組『サンデープロジェクト』で一緒に出演したときだ。

俺は彼のことを誤解してい

絵 佐々木悟郎

第47回 田中康夫

脱ダム宣言は

まったく俺と同じ考えだった

た。テレビにもひっぱりだこの人気者だし、パフォーマンスばかりやって知事に当選した奴だと思っていたのだ。

番組では、田原さんは田中を持ちあげ、俺を腐すばかりだった。ところが田中は、「田原さん、この人は違いますよ。元祖・脱ダム宣言の父です。国民のために公共事業のあり方を変えようとしている人なんです」と言ってくれた。

まさか、田中が俺のやってきたことを理解してくれているとは思ってもいなかった。このときから、彼の政策理念に関心を持つようになっていった。

派

閥の勉強会の講師に、田中を呼んだことがあった。だが脱ダム宣言をした県知事として、田中は地元選出の自民党議員からすれば敵である。派閥内からは「長野選出の小坂憲次や村井仁が必死で戦っている相手を、なぜ呼ぶのか。呼ぶなら派閥を辞める」と批判もあった。

しかし俺は、連中にこう言うて聞かせた。

「よく聞け！ あいつが言うて

いるのは、公共事業撲滅論なんかじゃねえ。俺たちが目指している、胸を張れる公共事業をやるうと言っているんだ」

連中も、しぶしぶ田中の講演を聞くことになった。ところが、終わった後、皆が口々にこう言うのだ。

「長野選出の議員たちが言っていたことと、ずいぶん違う。田中氏の言うとおりだ」

脱ダム宣言は、国や国交省に事前通達することなく、田中のトップダウンで出された。俺が政調会長時代に独断でやった公共事業見直しと同じ手法だ。県民のことを思い、権力欲にまみれた者からの批判を恐れず、己の信念に覚悟を持って決断するというのは並の政治家ではできないことではない。

そ

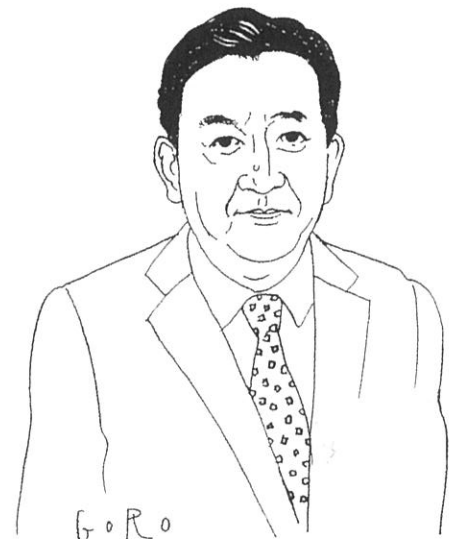
う言えるのは、俺自身の体験があるからだ。

俺の生まれた広島県庄原市川北町の山奥の村は、わずか20〜30軒の小さな集落。峠には吊り橋がかかり、せせらぎが聞こえる自然豊かな故郷だった。ところが、その集落がダム建設予定地になった。故郷を水没

させて潰したらいかんという思いで、建設大臣のとき、ダム建設を中止させた。

高齢化で過疎が進むなか、住民からすれば、ダムを作ることでも国に田畑を買ってもらい、お金も入るから良いと思うかもしれない。自治体にも補助金が入って田舎が潤うから良いとも思われがちだ。しかし、みんな本心では、安住の地としてそこで暮らしたいものだ。何百年先の子孫にも自然豊かな故郷を残していきたいと思っっているものなのだ。

田中も同じ考えだったに違いない。前知事時代に培われた「思考停止」の県民性をただし、公



共事業のあり方を県民全体で考えねば、いつまでも国に頼りきった体質は変わらないと考えたのだ。

補

助金頼りの県政から脱却し、大手ゼネコンだけが儲かって地方が疲弊する大型ダム事業は中止する。環境破壊を誘発するダム事業ではなく、自然豊かな河川や湖沼を子孫に残すため、治水・治山対策をしていく――。田中は河川改修に重きを置いた。

田中は連日、県の技術系職員を総動員した。県が管理する河川を総点検し、浚渫工事の補正予算を県独自で組み、河川の護

岸強化対策に没頭していた。護岸補強のために「鋼矢板工法」を取り入れるべきだと主張した。しかし国交省の役人らは、前例を踏襲しがちで、新たな鋼矢板工法の護岸改修に否定的であった。俺が大臣のときの尾田栄章河川局長などのような者もいるが、たいていはダムありきで、河川改修はコンクリートで固めれば問題ないという考えだったのだ。

ダムという構造物を作ると、新たな工業用水・水道の利権が生まれる。公共事業によるダム建設に、カネが生まれる構造物そのものに問題があるということも、彼らはなかなか理解しやうとしなかった。

田中は必死に役人と戦ったが、その後、長野県知事に就任した村井仁によって、事実上「脱ダム」を撤回されてしまう。国政に転じたものの、12年の総選挙では敗北してしまった。

田中のように、人間の血が通った政治家はそうはいない。殺伐とした世の中を変えるためには、田中のような政治家が必要だ。もう一度、政界に復帰してほしいと切に願っている。